

2024年度第2回教育課程編成委員会（情報ビジネス科）

- (1) 日時 2025年3月18日（火） 15時00分～16時00分
- (2) 場所 YIC Studio 2号館 2階 21教室
- (3) 出席者 阿部 誉久様（山口商工会議所 広域ビジネスサポートセンター長）
伊藤 恵一様（株式会社きらら 代表取締役）
河津 道正（副校長）
日當 泰浩（事務長）
森野 茂弘（教務課長）
豊田 菜摘（教務課長補佐）
赤木 康二（情報ビジネス科 学科長）

(4) 議事

1. 河津副校長挨拶

情報ビジネス科はYIC情報ビジネス専門学校の中で中心的な学科。Webビジネスとデザインの分野がコースとして始まって、デザイン分野は一昨年から独立して情報ビジネス科のみでやってきました。高校生の需要等も考慮して、募集を強化するという形で、後半でご紹介いたしますけれども、文部科学省の委託事業として理系転換事業に手を挙げまして、採択されました。新たな展開の方を図ってまいりますので忌憚のないご意見いただけたらと思います

2. 2024年度実績報告（報告者：赤木）

- 2024年度の成果報告（別紙1、別紙2に沿って説明）
2年生：22名全員が卒業（退学者なし）
1年生：入学者12名、退学者1名、進級予定者11名
※期末試験の結果により進級が困難な学生が1名おり、今後の判定会議で最終決定予定
- 2025年度4月の入学状況
現時点での確定入学者は16名（当初の17名から1名減）
入学率は141%（定員に対して）
- 卒業生の進路状況（在籍22名のうち）
就職希望者：21名（うち20名が内定、内定率95.2%）
進学希望者：1名（大学編入試験に挑戦するも不合格、現在別の大学を受験予定）
未就職者の対応：3月末より「しゅうなん若者サポートステーション」にて支援を受ける予定
- 資格試験実績
1年生の目標資格試験の合格状況が大幅に目標を下回っている結果となった。

3. 教育の取り組みに報告（報告者：赤木）

① 前回委員会の方で議題、問題点についての経過報告（報告者：赤木）

- 2024年度は「DX」を全面に打ち出した募集を実施したが苦戦したが、2025年度の募集は「Excel」「kintone」「企業連携」を前面に打ち出し、募集増となった。
- 学生は大体 ChatGpt を使っている。レポート提出においても AI が作ったというのがわかるようなレポートを提出する。AI チェッカーをかけたら、98%パーセントがA I 結果となりました。こういう点においてもA I の利活用について教育に次年度から取り入れていきたい。
- ビジネス法務について分野も広いので、学生と直接関わる分野を選定することで、身近な事例を使って授業をしていただいております内容は労務やハラスメントです。
- Udemy の動画を教科書として使ってみたが体系的にできてないので、必要な事項の抜けもあるので、教科書の使用を次年度検討する。

② 特別授業について

- 第19回若年者ものづくり競技大会ウェブデザイン職種の結果を報告
- 第19回若年者ものづくり競技大会グラフィックデザイン職種の結果を報告
- 長門峡梨組合のWebサイト制作について報告
- 企業連携・PBL（課題解決型学習）について報告
- 山口県中小企業家 同友会 会員企業 就職 説明会について報告

③ 2025年度 カリキュラムで実施する科目について次の科目について検討している

- クラウド開発は Microsoft Power Platform の使用
- CMS 活用では WordPress を中心に多様な CMS の学習を検討
- ビジネス会計ではコンピューター会計と簿記の相互学習を検討
- PBL については従来のプロジェクトベース学習を DX 分野でユニット型に発展していく

（伊藤委員）

内定者1名のメタインフォは同友会の企業で、自社でノーコード開発をされておられます。これから間違いなくノーコードは主流になってくると思います。API（アプリケーションインターフェース）で、キーントーンと他のシステムを繋ぐためのAPIが必要になります。社内でもノーコードで作った自社のシステムと自社のウェブサイトを一ムレスにつなぎ顧客情報をやり取りするためにAPIを使ってやり取りしたりしている。技術的にビジネスに転用しやすいのでご検討いただいてもいいと思います。

また、オンリーワンとしてどう個性を定義するかが大切です。1人の人間として、何を表現したい、何を訴えたい、そもそもとして訴える為には自分の中で定義を持たなきゃいけないしそれが成り立たないと個性は発揮できないと思います。その個性こそが、物を作ってみよう、何かを提案してみよう、イベントに参加してみよう、自分の作品を大会に出してみようといった発想にならないのかなと思います。

個人定義はなかなか難しいと思うのですがそこを教えていただけたら嬉しいなと感じました。

(河津副校長)

高校までの教育は基本的に個性を出さず皆と同じにやるとというのが基本の教育です。それを教えられている18歳の子が専門学校に来てからいきなり個性を出せるかと言えばできません。この学科に関しては、同じ年代の世界で過ごしてきたメンバーが、PBLの授業で大人の方たちと触れ合うことによってだんだん個性が出てくるというのが実情です。入学直後には期待には添えないかと思うんですが、徐々に個性を伸ばしていけたらという風に思っております。

(伊藤委員)

5歳の子供がいて育て方が僕らの世代とは全然違うようです。個性を伸ばすようということで、全てを容認し、否定をしないと、怒らないとか、叱らないとかいう風になっていて、昭和の頃とは真逆という状態です。そういう世代がこれから大きくなってこれ、ゆくゆくはその個性っていうのが定着化してくるのだろーと思います。今は過渡期かもしれないですね。

(阿部委員)

デジタルの取り組みがどんどん進まれている中、アナログ的かもしれませんが、今おっしゃった取り組みの中でコロナとかの背景があるとすれば、表現やコミュニケーションっていうのが、今後、仕事でスキルを活かす段階になると表現の場として全体ではなく少人数のグループワークとして表現の場を出すということが、人間性をさらに進められる。

(赤木委員)

言葉として表現できる子とそうでない子がグループワークでもみ合いながら、少しずつ言葉として表現できる人間になればいいと思っています。学生時代グループワークはなかなかできなくても、卒業して社会に出たら話さざるをえないっていうのが現状なのでいずれは話せるようになるっていうのはあると思います。その中であの時はできなかったけど、あの頃を思い出して先々にはできているという状況にもっていききたい。

(阿部委員)

グループワークでは自然発生的にリーダーとかを決めるのではなくて、マネジメントでいうとくじ引きで社長の役割を決めるというやり方もあるわけです。そしたら、そうやらざるを得ないのでやる。

zoom会議とかでもあるのですが、記録も残るので、他の誰がやり方とかを記録として短期間でも残すし、それを閲覧する機会をもつと他の人の振る舞いとか発言に刺激を受けるっていうところもあると思います。

(伊藤委員)

同友会企業では、朝礼で3分スピーチをする。各従業員でローテーションを決めてやっている会社があります。前日にあった嬉しかったと事か、皆の前で3分間ほどプレゼンを行う。約束事として、それに対して皆が褒める。要は承認欲求を満たしてあげる。皆が共感してあげるという事をやっている、すごいことだとか、おめでとうとか、そういうことをちゃんと言ってあげるっていうルールにして、それをローテーションしていると、だんだん人前で喋るのが苦ではなく怖くなる。

4. 理系転換プロジェクトについて

1) 背景

(河津副校長)

- ・文部科学省の理系転換事業に採択
- ・2026年度より「イノベーションコース」を新設

2)教育課程の今後の方向性

(赤木委員)

- ・文系・理系の融合（デジタルスキル×マーケティング）

情報ビジネス科のカリキュラムから引き継ぐ科目は引き続き理系科目を増やしていく。情報ビジネス科から、引き継がないのが簿記経理関係は行わない。マーケティング分野とITはDXに関わる分野ということで融合していく大学でいうところの文理融合学科と想定している。ITはツールのな要素であるということ認識してールとして活用できるという知識を身につけて、具体的にはPBLであったり、マーケティングの分野でツールを使ってより効率的にデータを分析、またAIを活用しながらより効率に、かつスピードアップで、時短処理できるイメージの人材育成が出来上がることを想定したカリキュラムになっている。

アントレプレナーシップ教育を推進し、いわゆる企業家精神といったものを身につけ、PBLの中でも、推進していける人材を育成する教育を考えております。

- ・AI・DXを活用したカリキュラムの整備

(阿部委員)

理系の中心的な科目の数学ですがそこで、アレルギーがでるかそうじゃないかっていうのが別れます。我々Windows3.1が出る頃ですね経済学部で文系ではあるけれども、そういったPCを使ってきた背景もあります。文理学部や、探究学部とか様相が変わってきています。だからこそ特化した何かを、幅広い分野の中で1つにフォーカスするのもよい。数学やPCはリンクするなら苦手を作らない人材を作るところが気になるかもしれない。

(伊藤委員長)

理系転換というよりはより実践に近い方にシフトされているイメージでした。企業側としてPBLがメインになってくるかなと思うのですが、日商簿記は正直使わない企業側では手形も使わないですし現金でもやり取りします。しかも現金そのものはもう会社にはないです。会計も全部クラウド上で全部完結できているので、その気になれば会計も家でできる。ツールの使い方なので、興味があれば覚えられると思います。イメージがとっても大切なもので、家計簿とかを生徒たちの家計簿をまずは作成してみてもどうかと思います。

会社は損益計算書と貸借対照表が出てくるので、逆に言えば、それが読めるようになれば、すごくアドバンテージになる。AIについては、実際に実務で使っている方に、お声がけした方がいいのではないかなと思います。私自身では、AIをどうやってビジネスに使うのっていうのがやっぱりまだピンと来てない。

当社に31歳の社員がいるのですが、AIを仕事にどう使うかと聞くと、いろんな使い方ができると言って、使い方について教えてくれる。餅は餅屋で実際に使っている世代や使っている人に教えて

もらった方がいいかなと思いました。同友会で実際にそれをメインで仕事している人がいるので、ご紹介します。

(森野教務課長)

次年度以降は大きくカリキュラムが変わっていて、新学科カリキュラムを組んでいきますので、次回の編成委員会の時に、分かっている範囲で発表していただいて、ご意見をいただきながら、作っていかうと思いますので、よろしく願いいたします。

本日の議論をもとに、より良い教育プログラムを策定していきます。本日はありがとうございました。

5. 決定事項について

次回の編成委員会の時に、新学科のカリキュラム案を提示する。

AIを業務に活用している企業の人から情報を収集する。

朝礼等でスピーチの時間を取り入れて、承認を満たしていく取組を行う。